

一、「正骨範」から見た江戸後期の整骨療養 陶 惠寧
 一、日本医史学会略史 岡田 靖雄
 六月例会 平成十一年六月二十六日(土) 順天堂大学医学部九号館八番教室

一、黒船来航と蘭医たち 望月 洋子

一、ドイツ自然研究者および医師協会の一七五年(一)

—実証・精密科学化の十九世紀— 小原 正明

例会抄録

家紋からみた杉田玄白の遠祖

中西 淳朗

一九九七年は杉田玄白先生の「一八〇年忌」の年に当る。即ち暦が三巡した訳であるが、九七年は特に記念行事はなかった。演者はこの区切りの年から玄白研究をしようと考えた。

その皮切りにこのテーマを取り上げた。

杉田玄白の肖像画は早稲田大学蔵の石川大浪筆の作品が有名であるが、袴をきた玄白像を演者はみたことがない。従って杉田家の家紋は何かと問われても即答は出来なかった。

芝愛宕山下の栄閑院に玄白の墓を訪れ、家紋を確認すると「鶴ノ丸紋」であった。玄白の家系は武蔵国に縁深い間宮家

とつながっていると云われているので、横浜市磯子区杉田の妙法寺に間宮家墓地を訪れたところ、「隅立四ツ目結紋」であった。そこで『新訂・寛政重修諸家譜・家紋』篇で調査したところ、杉田家も間宮家も共に隅立四ツ目結、鶴ノ丸紋を用いることが判明した。

杉田家は玄白より四代前の忠元という人が森家より養子に入られ、この方の実家の主紋が「鶴ノ丸紋」であったと考えられる。(間宮家と同じ宇多源氏佐々木諸流に、主紋を「鶴ノ丸」とする森氏一族がある)従って、杉田家が玄白の祖父から医を業とするようになって、表立つ紋を「鶴ノ丸」に変更したと推測している。

一九七七年、「市民グラフ・ヨコハマ第二十一号」が発刊され、「系譜のナゾ・玄白と林蔵の因縁」という記事が掲載され、この中に杉田松夫氏(玄端の孫)所蔵の「杉田家系譜」が写真で発表された。それには次の如く書かれている。

宇多源氏本国武蔵間宮分脉杉田、紋四ツ目結鶴ノ丸、宇多源氏佐々木支族間宮新左衛門信冬後胤。

間宮主水佐(信安) 居武州久良岐郡杉田邑、仕北条氏綱氏康、属間宮豊前守信高之部下、於諸々戦場尽軍功。

間宮主水次郎(長安) 改杉田氏、母行方彈正佐衛門女、大永四年甲申月日武州久良岐郡杉田邑(生)。

右の系譜は、日本医史学雑誌第八巻第三・四号——杉田玄白一四〇年忌記念特集号——収載の「杉田玄白の家系」の前面にある「杉田家記」の記事より一部分詳しく、前出の記事

だけでも重要な情報となっている。

- a、間宮信安は信高の部下である。
- b、杉田長安は一五二四年の生れである。
- c、長安の母は行方弾正佐衛門娘である。
- d、間宮も杉田も同一の紋である。

ここに書かれている間宮信高は、間宮本流の笹下系康俊の四男である。康俊は一五一八年の生れであるので、杉田長安より六歳年上である。つまり信安は孫の様な信高の後見役として戦場に立ったと云つてよいだろう。

杉田長安の母は、行方弾正左衛門の娘であり、行方も間宮も共に永禄二年の『小田原衆所領役帳』に姓名が記されており、行方は三六一貫文、間宮は六九八貫文の所領が与えられ、共に小机軍団の仲間であった。

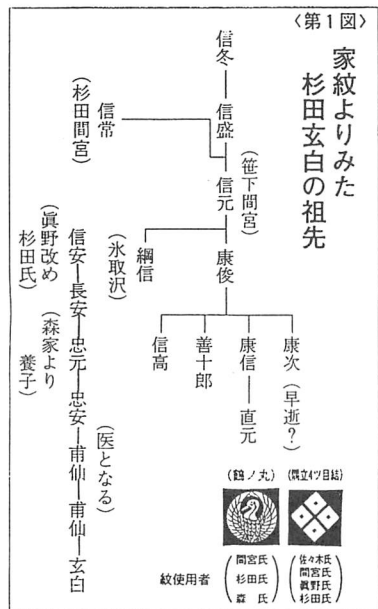
また行方弾正佐衛門という人は、後北条の武蔵防衛に欠くべからざる武將で、永禄十二年に羽田を守り武田軍阻止のため六郷橋を焼落したと伝えられている(小田原北条記)。

このように玄白の先祖が、間宮、行方と一体となつて、武田氏他と戦つたのは永禄年間(一五六三年前後)から二十五年位の期間と考えられる。

片桐一男氏の『杉田玄白』(吉川弘文館人物叢書)によれば、戦功によつて真野氏であった信安が間宮となり、さらに戦功を重ねて子の長安が杉田氏となつたという。

間宮氏は、永正以前(十五世紀の終末期)には伊豆田方郡間宮村(現在の函南町間宮・伊豆箱根鉄道大場駅下車)に住居し、

〈第1図〉 家紋よりみた 杉田玄白の祖先



北条早雲の関東進出に伴つて、永正七年(一五一〇)の神奈川権現山城の戦に参加、砦の門を開いて乗馬で突撃して名をあげたといわれている。(『図説・横浜の歴史』(横浜市)二二〇頁)ただし、この突撃した人物は間宮康俊の祖父信盛とも、曾祖父信冬とも云われており判然としなない。また彼等が関係したと伝えられる杉田の寺院に彼等の墓があるかも不明である。

今回紹介した「杉田家系譜」と片桐一男氏の記述とはほぼ一致している。そもそも間宮氏は康俊の六代前までは真野氏であった。間宮、杉田両家の家紋が一致している以上、玄白より十代以上前の遠祖が真野氏と同族関係であったとみてよいと考える。ただし、信安が間宮信盛の子であるとか、信冬の子であるとする説には賛同しかねるものである。

(平成十年十一月例玄)